

第1次

第1時

本時の
目標

これまでに学習してきた説明文の読み方をいかして、「人間は他の生物と何がちがうのか」を読み、筆者の主張に対する自分の考えをまとめることができる。

主な学習活動	主な発問・留意点	児童の反応・板書例
1 三つの教材を見渡し、学習の見通しをもつ。 2 説明文の読み方のコツを振り返る。 3 「人間は他の生物と何がちがうのか」を読み、筆者の主張に対する自分の考えをまとめる。 4 次時の学習を確認する。	今日から、六年生最後の国語の学習単元に入ります。テーマは「言葉について考える」です。 ○「人間は他の生物と何がちがうのか」↓「生きる」 ↓「中学校へつなげよう」の順番で学習することを確認する。 今日は、「人間は他の生物と何がちがうのか」を読みます。このような文章を何といえますか。 説明文の読み方のコツには、どのようなものがありましたか。 「人間は他の生物と何がちがうのか」を通して、筆者は何を伝えたかったのでしょうか。 筆者の主張に対する自分の考えをまとめましょう。 ○筆者の主張に線を引いてから、書かせる。 次の時間は、「生きる」を読んでいきましょう。	● 題名が問いになっているため、その問いに対する答えの文を探しながら、筆者の伝えたいことを捉えさせる。 ● 「言葉で世界を知り、言葉で世界を作ってきた」に着目し、この言葉の意味を児童に考えさせたい。 ● 筆者は「人間と他の生物とのちがいの根源には、言葉があります」と述べる。私たち人間にとって「言葉」とはどのようなものか、「言葉」がもつよさについて自分の考えをまとめさせたい。 ○ 問いの文と答えの文を探します。 ○ 筆者の主張と、その主張を支える事例を捉えます。 ○ 「例えば」「つまり」などのつなぎ言葉を手がかりにします。

第2次

第2時

本時の
目標

表現の工夫に着目して「生きる」を読み、好きなところや印象に残った言葉に基づき感想をまとめることができる。

主な学習活動	主な発問・留意点	児童の反応・板書例
1 前時の学習を振り返る。 2 詩の読み方のコツを振り返る。 3 「生きる」を読み、好きなところなどを共有する。 4 感想をまとめる。 5 次時の学習を確認する。	前回は、どのような学習をしましたか。 今日は、「生きる」を読みます。このような文章を何といえますか。 詩の読み方のコツには、どのようなものがありましたか。 ○詩を作る学習を想起させ、どのような工夫をしたか、作り手の視点からも考えさせる。 みんなで「生きる」を読みましたが、この詩の中で好きなところや印象に残る言葉はありましたか。 好きなところや印象に残った言葉を基に感想を書き、みんなで交流しましょう。 次の時間は、六年○組版「生きる」を、みんなで作っていきましょう。	○「人間は他の生物と何がちがうのか」を読み、筆者の主張を捉えて、自分の考えを書きました。 ○詩です。 ○連を一つのまとまりとして読みます。 ○繰り返し使われる言葉や文に着目します。 ○比喩表現がよく使われるので、どのように使っているかを考えます。 ○全ての連が「生きているということ／いま生きているということ」という言葉で始まっているので、心に残りました。 ○「ミニスカート」「プラネタリウム」「ヨハン・シュトラウス」「ピカソ」「アルプス」のところが不思議で心に残りました。 ●交流後に、前時で読んだ「人間は他の生物と何がちがうのか」の「言葉で世界を知り、言葉で世界を作ってきた」と関連づけて、考えを深めさせたい。

第2次

第3時

本時の 目標

六年〇組版「生きる」を作ったり、それを音読したりすることを通して、自分の考えを広げることができる。

主な学習活動	主な発問・留意点	児童の反応・板書例
1 前時の学習を振り返る。 2 六年〇組版「生きる」を作る。 3 六年〇組版「生きる」を音読する。 4 学習を振り返り、次の学習を確認する。	前回は、どのような学習をしましたか。 今日は、六年〇組版「生きる」をみんなで作ります。「生きているということ／いま生きているということ」に続けて、みんなで「生きる」の詩を作ってください。 〇個人で一／三行の「生きる」の詩を作る。その後、グループで順番を考え、「生きているということ／いま生きているということ」に続けることで一つの連とする。次に、グループごとの連を学級全体でつなげて、六年〇組版「生きる」を完成させる。 完成した六年〇組版「生きる」を、みんなで音読しましょう。 六年〇組版「生きる」の感想を交えて、今日の学習を振り返りましょう。	〔C〕「生きる」をみんなで読み、感想を交流しました。 ●個人では短冊に書き、グループごとにその短冊を並べ替えながら順番を決めて画用紙に貼り付け、その画用紙を黒板に貼り、学級全体で並べ替えるという流れで六年〇組版「生きる」を作ることができる。また、ICT機器を使って並べ替えをすることもできる。いずれにせよ、友達が作った詩を声に出しながら読み、順番を考えるようにしたい。 ●音読の方法はいろいろある。全文を全員で読むパターンや「生きているということ／いま生きているということ」は全員で読み、その他は自分が作った連のみ音読するパターンなど、いろいろ試したい。 〔C〕みんなの「生きる」の詩がおもしろかった。友達と笑い合ったり遊んだりしている場面を書いている人がたくさんいた。とても共感できた。

第3次

第4時

本時の 目標

本単元で学習してきたことを基に、言葉がもつよさを認識し、思いや考えを伝え合うことができる。

主な学習活動	主な発問・留意点	児童の反応・板書例
1 前時までの学習を振り返る。 2 学習したことをいかして、「言葉」についての自分の考えをまとめる。 3 「こんな力がついたよ。」「こんなときにいかそう。」を記入する。	今日までの学習を振り返りましょう。 「人間は他の生物と何がちがうのか」についての自分の考え、「生きる」についての自分の感想、六年組版「生きる」を基に、「言葉」についての自分の考えをまとめましょう。 ○三つの文章を基に、「言葉」について考えたときに浮かぶキーワードを出させる。そして、キーワードを基に、「言葉」についての自分の考えをまとめさせる。 これまでの学習を振り返って、教科書251ページの「こんな力がついたよ。」「こんなときにいかそう。」を書きましよう。 ○書いたものを交流することで、これから始まる中学校での新たな生活に意欲をもたせたい。	●三つの文章を基に「言葉」について考えたときに浮かぶキーワードとして、「共生」「つながり」「未来」「協力」「喜び」などが予想できるが、おそらく予想以上のキーワードが提出されるであろう。キーワードを手がかりに、「言葉」について自分の考えをまとめさせたい。その後、書いたものを学級で交流することで、友達が捉えた「言葉」を感じ取れる時間を設定したい。 ●国語科で学んだ言葉の力を、国語科という教科の中に閉じこめることなく、他者との関係づくりや学校生活、協働場面においていかせるように促したい。

■ 単元構成の考え方とポイント

小学生最後の国語科の単元である。四時間扱いで三つの教材を扱う。この単元では、今までの学びをいかして教材文を読み、小学校六年間で身につけてきた「言葉」の力を確認するとともに、「言葉」がもつよさを考えさせたい。

本指導案は教科書の掲載順と違い、「人間は他の生物と何がちがうのか」「生きる」「中学校へつなげよう」の順で教材を扱っている。「人間は他の生物と何がちがうのか」で筆者の福岡伸一が述べる「私たち人間は、種の保存より大切なことがないかを言葉を使って考え、一人一人の命を大切にしたいほうが、みんなが幸せになるということに気づき、その考えを言葉で共有してきました。言葉で世界を知り、言葉で世界を作ってきたのです」を、本単元の要にしたいと考えたからである。この言葉を受け止めたうえで、「生きる」を読み、自分たちの「生きる」を表現する活動を行うことで、「言葉」がもつよさを考える授業を展開したい。

■ 「人間は他の生物と何がちがうのか」を読む

この文章では、「他の生物」の事例として、ツチハンミョウという昆虫を挙げている。ツチハンミョウにとっては、「個体の命よりも、種を保存することのほうが重要」とまとめ、「これは他の生物でも同じ」と生物全般に一般化している。そして、「私たち人間はどうでしょうか」と話題を「人間」に変え、この問いに対して「種の保存よりも、個体の命を最重要に考えている」と答えを提示する。その

理由を、進化の過程で人間だけが「言葉」を発明したからだと述べる。「言葉で世界を知り、言葉で世界を作ってきた」のが人間の特性だから「私たちは言葉を大切にしなければならぬ」と筆者は主張する。最後の段落では、「みなさんは、言葉の力をみがかなければなりません。これが、学ばなければならないことです。そして、けんきよさをもちつつ、言葉で世界を解き明かしていったほしいと思います」と児童にメッセージを送る。

この説明文では、「言葉で世界を知り、言葉で世界を作ってきた」に着目し、この言葉の意味について考えさせたい。

■ 「生きる」を読み、「生きる」を表現する

「生きる」は、谷川俊太郎が一九七一年に発表した作品である。五つの連で構成されており、全ての連が「生きているということ／いま生きているということ」という言葉で始まっている。作者は、さまざまな視点や状況から、「生きる」ことをリズムよく表現している。読み終えた後に、読み手は、自身にとっての「生きる」とは何だろうと自然に考えるだろう。

第二時で捉えた詩「生きる」の中に自身を登場させる営みとして、六年〇組版「生きる」の創作を行う。それぞれの「生きる」を紡いでいく活動は、言葉で世界を知り、言葉で世界を作る活動につながる。児童には、表現と理解を循環させながら、「言葉」がもつよさについて考えてもらいたい。